

# 画像資料と民俗学

小川 直之(國學院大學文学部教授)

## 1. 学術資料としての画像

本稿では、民俗学の立場から画像資料がどのように位置づけられるのか、また画像資料が民俗研究においてどのような可能性をもつのかについて検討しておきたい。もちろん画像資料というのは、学術研究においては、資料の一部、つまり対象をどのように資料化していくかという、資料化の1つの手段、方法として存在していることはいままでもない。

例えば考古学でいえば、発掘によって遺構が出てきて、そこに土器が残されていた場合、それをそのままの状態に常に保ったり、持ち歩いたりすることはできない。従って、学問的な検討を加えていくときには、それを何らかの形で資料化することが必要になってくる。その方法が、例えば図面であったり、写真であったりするのである。至極当然のことで、民俗学も全く同じで、例えば1つの祭りや儀礼、習俗があっても、その状態を保ったり、持ち歩いたりすることはできないので、何らかの方法で資料化を行ってきた。

つまり、こうしたことからいえば、資料化の手續というのが学問の方法の基礎をかたちづくっていると見える。どのようにして対象を学術資料として定着させていくのかということである。その手続きや方法として民俗学では、「聞き書き」ということを行い、あるいは実際にその祭りや儀礼、習俗を「観察」という手法によって資料化を計ってきた。具体的には「聞き書き」や「観察」で得られた情報を文章によって表現する、これがひとつの方法として行われてきたのである。また、それをスチール写真とか映画によって、画像として資料化し、表現することも行われてきた。さらにまた、物質文化を扱う場合には、民具研究として対象を図面にして資料化し、表現していくことが、特に昭和50年代以降行われてきたのである。

画像というのは、このように対象を資料化し、これによって表現を行っていく手段であるということ、まず認識することができる。しかし画像には一方では、ある情感を伝える機能があることも、敢えていう必要がないことである。写真を見て、そこから私たちは何らかの思いをもつのであり、その思いというのは、感情的な情感だけではなく、学問的な意味での「実感」など、理論的な情感という二面性をもっている。このように画像資料といった場合には、資料化の方法としての画像と、情感を伝える画像という2つの面があるということをお忘れはならない。

資料としての画像とは、当然ながら、いつ、どこで、誰が、何を撮影したのかということが明確になっていない限り、その資料的な価値は低いといわざるをえない。撮影した人が何を意図して撮影したのかということも重要になる。少なくとも、写されている場がどこであるのかが分かっている必要はない。現在では、写真を撮るという行為は日常的になっているわけで、この時にそれぞれの写真について、いつ、どこで、何を撮ったのかを明確にしておくことは、わけもないことだと思っている人がいると思う。ところがこれがなかなか厄介なことで、例えば私は民俗学を勉強し始めて30年余り経つが、この間に撮影した写真全てについて、こうした情報を確実に残しているのかというと、そうではない。多くの写真について、記憶にとどめていても、その基本情報を放置してしまっている。歳をとって体が動かなくなったり、死没したりして記憶が失われた後に、これらが学問的な画像資料になり得るのかということ、それは難しいといえる。

個人の性格にもよるのであるが、撮影者が画像資料の個々について基本的な情報を残すというのは

そんなに容易ではなく、画像によって対象を資料化していくということは、いうのは簡単だが行うには難しということになる。

國學院大學折口博士記念古代研究所には、折口信夫が沖縄で撮影した写真、それ以外の日本各地で撮影した写真が多くある<sup>(1)</sup>。これらは、いつ、どこで、誰がということがわかっているにもかかわらず、後にそれぞれの写真は、撮影者の意図とは別の読みが行われていくことがある。場面の瞬間を切り取った画像というものは正直な面をもっており、1枚の写真の中には撮影者の意図とは別の情報が収められていて、撮影者以外の者が写真を読み取っていく場合には、撮影者の意図とは別の読みをすることが十分あり得る。

この学術フロンティア事業で扱っている古写真の場合には、このことが大変重要である。撮影者の意図とは別の読み取りが成り立ち得るということは、別のいい方をすると、画像そのものには撮影者が意図しないにも拘わらず、さまざまな情報が盛り込まれているということである。そもそも画像というものには、文章では表現しきれないほどの豊かな情報が含まれているのである。

画像を資料として扱うときに、今回のシンポジウムのタイトルのように「画像資料論」と、「論」を付けなければならない理由は、画像にはここまで述べてきた3つの面があるからである。つまり1つには、画像は、ある対象を学術資料としていくときの手段であり、資料化の方法としての議論が必要になる。それは、写真そのものが何らかの情感を伝える、また、写真の内容には、撮影者の意図とは別の読み方ができる場合があるという特質があるからである。「画像資料」というだけではなく、ここには当然ながら何らかの議論、つまり資料批判を行うという意味での「論」がなければ学問的には十分ではないといえる。画像には、上に述べてきたことの裏返しの面があって、いつ、どこで、誰が撮影したのか明確であっても、その写真は嘘であるという場合がある。たとえば折口信夫の『古代研究』国文学篇に収められた写真には「寄り神をまつたタブの杜」がある。よく知られている写真だが、これは嘘の写真といえる。すでに池田弥三郎が指摘しているように<sup>(2)</sup>、これは能登の一宮である気多大社の写真で、折口は、ある意図をもって杜の手前にある石垣を全部消して使っている。なぜ消したのかというと、石垣があると、折口が持っている古代のタブの杜というものの情感が伝わらないと考えたからであろう。写真をよく見ると、うっすらと石垣が残っており、また、鳥居を写真から抜くことは技術的にできなかったのではないかと思う。

画像を、対象の資料化の手段として、あるいは何らかの情感を伝える手段として、さらに逆に画像からどのように情報を読み取るか、これら3つの面から画像についての議論を進めていくのであるが、表現の手段ということに重きを置くなら画像を加工して、実際とは違ったものとして使っていくこともあるわけで、こうしたことが画像資料のひとつの落とし穴になっているということができる。折口の例ばかりではなく、有名なものとしては湾岸戦争のときに、真っ黒に油まみれになった水鳥の写真が、イラクが軍事作戦の1つとして意図的に原油をペルシャ湾に流した、というアメリカの主張とともにグローバルに配信され、さまざまなメディアで取り上げられたことがある。しかし、この報道写真にはトリックがあったことが検証されており<sup>(3)</sup>、こうしたところに「論」という言葉をつけなければならない理由があるといえる。

## 2. 民俗学における画像資料の利用

それでは次に、民俗学では、画像資料をどのように使ってきたのか、あるいはその利用にどのような可能性があるのかについてみていきたい。まず民俗学関係の学会創設をたどっていくと<sup>(4)</sup>、ここには日本が明治維新を迎え、その後欧米から文明の摂取を盛んに行っていくのと同じような状況を見

ることができる。具体的には表1のように、いわゆる人類学という用語で表現できる、欧米の文明としての学術が日本に入ってきて、東京帝国大学を舞台に明治17(1884)年に人類学会が創設される。坪井正五郎など何人かが参加して組織され、明治19(1886)年には『人類学会報告』という会誌が発行されるが、この会は同年には東京人類学会と改称され、会誌も『東京人類学会報告』となる。この学会の流れは現在も続いていて、途中、明治44(1911)年には『人類学雑誌』という名称になり、現在では『Anthropological Science』として刊行されている。つまり、文明の摂取のなかでいち早く国内に学術が根付いたのは東京帝国大学で、それは欧米から移入された人類学会として組織化されている。

民俗学のような日本国内の、しかも庶民文化に対する視点が徐々に育っていくのは、明治末・大正期からといえる。それは欧米からの文明摂取が少し落ち着き始めてからであった。柳田國男は東京帝国大学で農政学を学び、明治33(1900)年には官僚として農商務省に勤務するが、当時の地方改良運動を批判しながら地方の生活実態に目を向けるようになる。明治42(1909)年には椎葉村の狩猟伝承を中心とした『後狩詞記』、明治43(1910)年には佐々木喜善から聞いた遠野の伝承に基づいた『遠野物語』を執筆し、さらに南方熊楠との交流の中からヨーロッパの民俗学を知るようになる。こうした流れのなかで、大正2(1913)年には柳田國男と高木敏夫編集による『郷土研究』が発刊されていくのである。この雑誌は、すでに明治43年に設立されていた「郷土会」の活動を背後にもちながら発刊されたといえる。「郷土会」というのは、新渡戸稲造を会長に仰ぎ、柳田が主導した会で、その設立は新渡戸が提唱していた「地方学」と、柳田が考えている郷土研究がリンクして行われ、歴史学、地理学、農学などさまざまな分野の研究者が参加し、民俗学固有の会ではなかった。一方では、石橋臥波・坪井正五郎などが中心になって明治45(1912)年に日本民俗学会を設立し、『民俗』という雑誌が刊行されるが、この会は短命で、学問的世界への影響力はなかったといえる。

柳田國男を核にして、現在の民俗学につながる雑誌としては『郷土研究』があるわけだが、これには挿絵はあるものの写真の掲載は行われていない。画像資料である写真が掲載され始めるのは、『郷土研究』が休刊し、その後を継ぐかたちで折口信夫らによって発刊される『土俗と伝説』である。大正7(1918)年8月に創刊される『土俗と伝説』のなかには写真が多く使われている。喜田貞吉が主宰する『民族と歴史』(大正8(1919)年創刊)の場合は表紙に写真や図版が用いられ、その後、柳田國男・石田幹之助・田辺寿利・奥平武彦・岡正雄・有賀喜左衛門が編集をして大正14(1925)年に創刊される『民族』にも画像資料の掲載が行われていく。さらに折口信夫が積極的に関わって昭和2(1927)年に民俗芸術の会が設立され、昭和3(1928)年に創刊される『民俗芸術』では写真が重要な位置をもち、また、昭和3年に創刊される『旅と伝説』にも写真が資料として掲載されている。民俗学関係の研究雑誌を見ていくと、このように大正時代半ばから徐々に写真掲載が行われるようになっており、画像による対象の資料化と表現ということでは、大正時代半ばがひとつの区切りとなっている。明治22(1889)年から刊行が始まる『風俗画報』では、その書名の通り、各地の祭礼や行事等々が盛んに図版で紹介されるが、大正7年の『土俗と伝説』以降は、学術雑誌にも写真掲載が行われていくのである。

例えばここであげた『土俗と伝説』、『民俗芸術』、『民族』について、具体的にどのように画像資料が使われているのかを見ていくと、表2のように、まず初めの『土俗と伝説』第1巻1号では、ニコライ・ネフスキーによる陸中遠野の「獅子踊り」写真が表紙に使われ(図1)、さらに折口信夫が「岡本彦七」の名で執筆した「だいがくの研究」には「だいがく」の写真と図(図2)、佐々木喜善の「おしら神異聞」には「おしらさま」の写真が掲載されている。『土俗と伝説』は結局は第1巻4号で終刊

表1 民俗学関係学会創設と会誌の発行

西暦	和暦	学会及び誌名
1885	明治 18 年	人類学会 東京人類学会
1886		『人類学会報告』『東京人類学会報告』
1887		
1888		
1889		『風俗画報』
1890	明治 23 年	
1891		
1892		
1893		
1894		(明治 27 年 11 月 『國學院雑誌』 創刊)
1895	明治 28 年	
1896		
1897		
1898		
1899		
1900	明治 33 年	
1901		
1902		
1903		
1904		
1905	明治 38 年	
1906		
1907		
1908		
1909		
1910	明治 43 年	
1911		『人類学雑誌』
1912		日本民俗学会 柳田國男・高木敏雄
1913		『民俗』『郷土研究』
1914		
1915	大正 4 年	
1916		478 号
1917		折口信夫 4 卷 12 号
1918		『土俗と伝説』 喜田貞吉
1919		4 号 『民族と歴史』
1920	大正 9 年	
1921		
1922		改称
1923		日本社会学会 『社会史研究』
1924		『社会学雑誌』

1925	大正 14 年			柳田國男ら 『民族』				
1926								
1927							折口信夫ら	
1928				折口ら			『民俗芸術』『旅と伝説』	
1929				『民俗学』	4 卷 3 号			
1930	昭和 5 年			岡村千秋				
1931				『郷土研究』復刊		5 卷 6 号		
1932							『ドルメン』	
1933				5 卷 11 号				
1934				日本民族学会	7 卷 7 号		関敬吾	民間伝承の会
1935	昭和 10 年			『民族学研究』			『昔話研究』	『民間伝承』
1936								
1937								
1938								
1939						5 卷 7 号		
1940	昭和 15 年							
1941		日本人類学会						
1942								
1943								
1944								17 卷 1 号
1945	昭和 20 年							
1946								
1947								
1948								
1949							『岡山民俗』	日本民俗学会
1950	昭和 25 年							
1951		『地方史研究』						
1952								
1953							『日本民俗学』	
1954							『山陰民俗』『民俗』	
1955	昭和 30 年							
1956				『社会 と伝承』				
1957						『西郊民俗』		
1958							『日本民俗学会報』	
1959								
1960	昭和 35 年							
1961								民俗芸能学会
1962								『民俗芸能』
1963								
1964								
1965	昭和 40 年				昭 52			
		『Anthropological Science』『社会学評論』『民族学研究』			『日本民俗学』昭和 45 年 1 月から			

となるが、各号とも表紙に民俗写真を掲げ、本文中にも何枚かの写真を使っているのであり、民俗学関係の学術雑誌では、これが画像資料利用の嚆矢といってよい。次の『民族』になると、民俗学の研究者だけではなく、鳥居龍蔵や原田淑人、浜田青陵など、人類学や考古学研究者たちも参加していて、多岐にわたる画像資料が使われているのが特色である。

個々の掲載写真についての説明は省くが、現時点までに検索を終えた、大正7(1918)年から昭和5(1930)年6月までの学術雑誌・研究書における掲載画像資料一覧をあげると表2のようになる。写真を論文などに使って何らかの表現を行っていくということでは、早川孝太郎や折口信夫が積極的であるのがわかる。柳田國男の論文でも写真が皆無というわけではなく、昭和3(1928)年6月の『民俗芸術』第1巻6号の「島の歴史と芸術」に「布さらし節」の写真、昭和4(1929)年4月の『民俗芸術』第2巻4号の「人形とオシラ神」に「鳥取の流し雛」「紀州湯川明神の人形」「八王子の車人形」の写真などが使われている。ただし、これらについては柳田自身が掲載を指示したのか、雑誌編者が関連写真を挿入していったのかは不明である。

画像資料による民俗の資料化と表現ということでは、『土俗と伝説』『民俗芸術』という雑誌が重要であることは明らかである。『郷土研究』の表紙は挿絵であったのが、『土俗と伝説』表紙では写真となり、『民俗芸術』では口絵写真を付けて解説がなされる(図3)というように、画像資料の扱いが重くなっていくことも指摘できる。さらに注目されるのは、折口信夫の「だいがくの研究」を見ると、ここでは図2のように写真と図解とが並置されていることである。これは現在の学問水準からいうなら特記されることではないかもしれないが、大正7年時点で、論文のなかでこうした表現の方法をとっていることは刮目すべきだといえよう。折口の場合、こうした手法は図4A・Bのように大正12(1923)年の沖縄調査の時にも行っており、対象である民俗事象の資料化には極めて高い客観性を与えていたといえることができる。

学術雑誌・研究書における掲載画像資料一覧以降のものでは、やや時代は下るが、昭和12(1937)年5月に、渋沢敬三が主宰したアチック・ミュージアムが刊行する『民具問答集』では、図5のように写真カタログともいえるような、対象写真を掲げてこれについての解説を施していくという表現方法がとられている。現在、盛んに作成公開されつつあるWeb上での資料データベースやデジタルミュージアムの手法は、多くが基本的にはこの『民具問答集』の延長線上にあるといっても過言ではなからう。『民具問答集』の場合には、それぞれの民具の写真がなければ全く意味のないものになってしまうわけで、対象が写真によって表現されていることが重要な意味をもっている。

### 3. 柳田國男と折口信夫の画像資料の位置づけ

大正期から昭和初期にかけての民俗学における画像資料利用の概略は以上のようなになるが、ここで当時の柳田と折口の画像資料の位置づけについて触れておくと、両者には大きな差があるといえる。

例えば柳田國男は、郷土会のメンバーを中心に、民家研究会の白茅会の会員を加えて大正7年8月15日から25日にかけて内郷村で共同調査を行っている。この調査は郷土会に参加しているさまざまな分野の研究者たちが1つの村落で調査を行ったもので、いわゆる組織的なフィールドワークの嚆矢といえることができる。参加しているメンバーは柳田以下、地理学や農学、植物学など多分野の人たちで、もちろん総合的な村落調査としても初めてのものである。この調査は、事前に調査内容の検討が行われ、調査項目を作成して臨むというもので、現在は神奈川県相模湖町となっている内郷村の小学校長・長谷川一郎、青年団長・鈴木重光などによる全面的なバックアップがあって実現し、郷土誌の作成が目指された<sup>(5)</sup>。しかし、調査終了後の柳田の発言を見ていくと、総合的な村落共同調査は失

敗であったと、成果については否定的である。調査結果は、参加者が『都市及農村』という雑誌に論考、見聞録、エッセイを執筆するにとどまっておらず、柳田はこの調査が失敗だったことを踏まえて「村を觀んとする人のために」という論考を著わし、フィールドワークの方法について再説していく<sup>(6)</sup>。また、「相州内郷村の話」と題して共同調査の成果を発表し<sup>(7)</sup>、大正 11 (1922) 年 3 月に発刊する炉辺叢書の 1 冊である『郷土誌論』(郷土研究社)に収録していくのである。

この「相州内郷村の話」では、実際の現地調査では「最優良の人足が、延べにして九十二、三人程出たのであります。とんと田植を見たやうな騒ぎで、いや此二万分一図は古いことの、わざわざ印刷して持つて往つた一万分一が違って居るから直すのと、其は其は綿密な穿鑿を致しました」と、調査の充実ぶりを述べ、続いて「カメラなども大小四つか五つ有りまして、少くとも百枚以上ぱちぱちとやりました」と言っている。そして、この調査については「同行の諸君の意見は未だちつとも承はつて居りませぬが、私だけの実験は、一言を以て申せば村落調査と云ふものは、非常に面白いと同時に、非常に六つかしい仕事だと云ふ、是だけであります」と感想を述べている。

大正 7 (1918) 年の内郷村調査には、このように複数のカメラが持ち込まれ、当時としては多くの写真が撮影されているが、「某会の席上にて」と副題された「相州内郷村の話」では、発表時には「残念ながら今晚は其地図も写真も、悉皆持参することを忘れまして」と写真の提示は行われていない。これは意図的に持参しなかったのか、うっかり忘れたのかはわからないが、少なくとも調査後に『都市及農村』に寄せた論考にも写真の使用は行っていないのであり、こうしたことから、どうも柳田國男は画像資料というものに重きをおいていなかったのではないかと思われる。口頭発表にも論考にも写真を使っていないことには何らかの理由があると考えられよう<sup>(8)</sup>。これについては今後の課題となるが、ここで指摘できるのは、柳田の文章を見ていくと、その表現は紀行文が土台になっていることができ、これは画像でいえば、動画の世界が柳田の世界だといえるのではないかということである。描写の連続性のなかで思索を展開し、結論を導き出していくという方法で、瞬間的にある場面を写し取るスチール写真の発想はなかったのではないかと思う。

これに対して折口信夫の場合は、大正 10 (1921) 年の沖縄調査、壱岐調査にカメラを持参して撮影を行い、自分の著作にも画像を入れていく。先述したように大正 7 年 8 月に『土俗と伝説』に発表する「だいがくの研究」では、「だいがく」の写真と図解とを並置して論述し、前掲したように大正 12 (1923) 年の沖縄調査でも、写真と図解を並行して資料化を進めている。

このような折口の画像によって資料化を進めるという発想については、例えば大正 4 (1915) 年 4 月 22 日の「日記」の記載内容からその一端をうかがうことができる。4 月 22 日の「日記」の、25 日の「追ひ書き」には「ひる三越で糸はがき写真をとる。金ちゃんと喜三ちゃんとの為である。よっぽど手札形にとらうとしたが、例の焦慮がゆるさなかった。子どもの時から、瞬間の猶予もなく対象を把握せんとした癖が、今に残ってゐる」<sup>(9)</sup>とある。重要なのは「瞬間の猶予もなく対象を把握せんとした癖」という表現で、ここからは瞬時にしてある情景を読み取っていくという感覚が折口のなかにはあったということである。

つまり、柳田國男の文章が紀行文の発想で、画像でいうなら映画の世界ならば、折口信夫はスチール写真の世界といえるわけで、何十分の一、何百分の一秒というシャッタースピードで情景を写し取っていくのと同じようにして、瞬時に対象を捉えて短歌として表現していくことを繰り返している。いわば写真表現と近い感覚が折口の中にはあったと思われるのであり、これは、写真の世界でいうなら、ほぼ同時代に「光と其諧調」を重視する風景写真論を展開した福原信三の「俳句写真論」と相通ずるところがあるようにも思われる<sup>(10)</sup>。

折口がさまざまな人に出した書簡<sup>(11)</sup>を見ていくと、大正7年4月12日付けで胡桃沢勘内に宛てた封書では、今度、自分が編輯人になって『伝説と民俗』(実際は『土俗と伝説』という雑誌名で発刊)という雑誌を出すことになったが、これは「まじめな、かたはら、多少通俗的に、絵や、写真も入れて出すことになってゐます。何分の、御手助けを願はねばなりません。今度は、ねふすきいさんも、書いてくれるはずになって居ります。どうぞ、小篇・報告・写真の類、御めぐみを願ひます」と記している。「通俗的に、絵や写真も入れて」と言っているが、この表現は次元を下げてということではなく、当時の社会情勢にあわせて出版物にも絵や写真を入れたいと理解できる。明治33(1900)年に私製葉書が解禁になって絵葉書の発行が始まり、ニュース性の高い絵葉書が次々に発刊され、多くの人がこれを買って求めたという状況があったのである。折口は画像のもつ有用性をいち早く認識していたと考えることができよう。折口の書簡では、明治40(1907)年9月2日付けで蛸谷金太郎に宛てた葉書は絵葉書だし、大正8(1919)年9月8日には郡上八幡から柳田に宛てた葉書には「焼けた町々の写真は、その節、下から見舞に来た人々が、買って帰って、一枚もありません」として、焼け残った郡上八幡全景絵葉書を使っている。さらに、大正9(1920)年10月頃と思われる新野の仲藤増蔵宛の未投函書簡では、明年1月に参る際には「写真機持参仕り、舞人などの風姿永遠に残し置き度存じ候」としている。

民俗学界における画像資料論については、菊池暁『柳田国男と民俗学の近代 奥能登のアエノコの二十世紀』(吉川弘文館、平成13(2001)年10月)、矢野敬一「戦前における映像メディアと『郷土』の表象 - 熊谷元一『会地村 一農村の写真記録』と民俗学 -」<sup>(12)</sup>などにとどまっているのが現状である。画像資料論については、学界での議論は極めて低調であったといわざるをえないのであるが、矢野はこの論文で熊谷元一の『会地村 一農村の写真記録』について、当時の社会情勢のなかでの位置づけを試みるとともに、民俗学における写真利用について分析している。熊谷の写真帳の位置づけはともかくとして、民俗学における写真利用の分析については、状況的であり、しかも画像資料に積極的であった折口信夫やアチックミュージアムに言及されておらず十分とはいえないが、柳田國男とその周辺において確認できるのは「記録と表現の技法としての写真は昭和10年代前半と後半とでは、その位置付けに大きな転換があるという点だ。萌芽的ではあれ、写真を調査の技法の一環として受け止めようという姿勢から、逆に写真の記録手段としての独自性への関心を後退させていく姿勢へと。一言で言えば転換の内実はこのようなものとなる」という重要な指摘をしている。

矢野のいうように、いわば民俗学の本流での画像資料の認識と扱いが、民俗学における画像資料論の低調さにつながっていることはいうまでもなからう。しかし、折口信夫や渋沢敬三・アチックミュージアムを視野に入れるなら、やや異なった状況が見えてくることは、前述の通りである。

すでに別稿で述べたように<sup>(13)</sup> 國學院大學折口博士記念古代研究所には、大正10(1921)年以降、折口あるいは調査同行者が撮影した民俗写真が約2200点、折口のコレクションになる戦前までの歌舞伎絵葉書が約2500点残されており、画像に対する思いは柳田のそれとは全く異なっていたということができそうである。折口による画像資料については別途稿を改めて論じることを考えているが、画像による対象の資料化と表現ということでは、早川孝太郎、そして昭和初期以降の渋沢敬三・アチックミュージアム資料が重要なもので、あわせての検討が必要になってくる。未刊ながら、本学術フロンティア事業では平成14年度に「近代庶民生活と画像資料」と題して、須藤功、香月洋一郎、斉藤多喜夫、田辺幹、山内利秋、そして小川直之によるシンポジウムも行っており<sup>(14)</sup>、この成果刊行もあわせて行っていく必要がある。



#### 4. 画像資料から民俗を読む

学史的には検討しなければならないことが多くあるが、今後の画像資料論にむけて、従来の民俗学の成果をもとにして、ここで画像資料の可能性について検討しておくことにする。

画像資料論を行っていくときに、まず初めに取り上げなければならないのは、アチックミュージアムである日本常民文化研究所が、渋沢敬三の発案で行った絵巻物の研究である。渋沢は昭和4(1929)年に早川孝太郎に誘われて奥三河に行き、花祭りや当地の生活のあり様などを見学する。そして、花祭りを中心とした奥三河の暮らしを記録映画化していく。渋沢は民俗の映像記録をいち早く手がけていくのであり、こうした画像資料の着想が基になったとも思われるのが、昭和15(1940)年に開始される、画像記録ともいえる絵巻物を用いた生活文化研究である。アチックミュージアムによって絵巻物研究会として開始され、第二次世界大戦によって中断した後、昭和30年代に再開されて絵巻物の複写を行いながらそこに描かれている場面の解説、各場面に登場する行為やものについての分析が行われていく。その成果が『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻<sup>(15)</sup>として刊行されるのであり、この研究は今日的な画像資料研究の先駆的な業績として、高い評価が与えられている。

この成果を現在から振り返ってみて、こうした研究が意味するところを考えると、これは描かれた画像を見ながら民俗を発見していく作業だといえよう。つまり、定型的な、伝承されている生活様式を見い出していく研究だと理解することができるのである。こうした手法は現在私たちが写真を撮影するとき、あるいは古写真を見るときにつなげることができるわけで、画像から民俗を発見していく、そしてその画像の細部の把握ということが画像資料論のなかでは必要であるといえよう。

『絵巻物による日本常民生活絵引』では、図6のように画像の細部に番号をつけて、これに従って逐一説明しているのであって、細部の読み取りを行っていることがわかる。これとまったく同じ手法で編まれたのが須藤功編の『写真でみる日本生活図引』全9巻(弘文堂、平成5(1993)年刊)である。この本の第1巻である「たがやす」は、各章の概説を編者の須藤が執筆し、個々の写真の概説と写し込まれた細部の説明は筆者が執筆した。編者の須藤が写真を選び、解説すべき細部に番号を付したものを渡され、これに従って解説を行った。つまりは、番号が付された細部の読み取りと、1枚の写真全体が表している主題を読解していくことが要求されたわけで、この作業が民俗の発見と細部の読み取りということになる。

しかし、この作業は先程も述べたように、撮影者の意図を離れて筆者がこの写真をどのように読み取っていくかということであり、撮影者の意図と同じように筆者が読み取っているとは限らない。画像資料論というような議論が必要になる理由は、こういうところにもあるわけである。たとえば図7にあげた写真は、須藤によって「山村の畑」という画題が与えられ、これに従って写真解説と細部の説明を行ったが、写真の読みによっては、手前に写っている6人の少年たちの農作業というところに撮影者の意図があったのかもしれない。そうであるならば、確かに山村の畑作業には違いはないが、少年の集団作業に大きな意味があるともいえよう。

図8の写真の場合は、母親が赤子をあやしている場面と水田の脇の小屋のようなところで家族がそろって昼食をとっている場面である。これらの写真は「昼どき」であることには違いなく、民俗学からはここにあるような読解ができるが、この一家団欒の光景は、例えば家族史からの観点、歴史学からの観点からだとどうなるのか、母親が赤子をあやしている写真は、この場面をめぐって家政学や教育学からさまざまな議論が可能になってくる。このように考えると、画像資料をめぐってはその資料論と、もうひとつ非常に重要なことは、画像読解をめぐる議論を行い始めると、ひとつの学問分野

ではおさまらない、濃密な情報が写真には内包されているということである。1枚の写真には、その読解に関して深い学際性が要求されるのである。

画像資料論を展開させるのなら、そこには学際的な研究の必要性が生じてくるわけで、さらにこれを推し進めていくと、近代以降創り上げられてきた学問的なディシプリンの組み替えが課題となってくる。たとえば画像資料学会のような学会が立ち上がってこない、1枚の画像資料を十分に活用していくことができないのではなかろうかということである。

もうひとつ例をあげると、図9は京都市文化財保護課が刊行した『一枚の写真 - 近代京都庶民生活写真引き -』（平成11(1999)年11月）に収録されたものである。これは『写真でみる日本生活図引』と全く同じ手法で作成されたもので、ここにある場面は、民俗学だけでは十分な説明ができないというまでもない。左側の「お祓いを受ける兵士たち」の読解には、近代史とか神道史の研究者の参画が必要になるし、右側の「戦地での慰問団」についても近代史、芸能史などの研究者の読みが重要になる。

図10は、私が編集を行った神奈川県『山北町史』別編民俗（山北町、平成13(2001)年3月）の写真読解である。これも『絵巻物による日本常民生活絵引』・『写真でみる日本生活図引』と同じ手法で写真を扱ったもので、画像資料が地域史研究のなかでどのように活用でき、文章による表現と比べてどのような利点があるのかといった議論が必要になってくる。自治体史編纂のなかに図録編を作成することは従来から行われ、ビジュアルであるということにその特色がいわれてきたが、さらに一歩深めて、画像資料の資料的批判や歴史叙述のなかでの意味を検討する必要がある。

次の図11は、香月洋一郎著の『景観のなかの暮らし - 生産領域の民俗 -』（改訂新版）（未来社、平成12(2000)年12月）に収録されているもので、ここでは写真からある見解を叙述していくということが行われている。香月は写真と図を組み合わせることで、ひとつの情報を読み取って表現しようという手法を示している。単に写真を読解していくというのではなく、そこに別の表現を加えることで新たなものを発見していくという手法が目できよう。

ここまでは、1枚の写真の読解と細部の読み取りの例だが、図12はこれらとは違って、変化をどのように表現していくかという例である。これは滋賀県立琵琶湖博物館が刊行した『私とあなたの琵琶湖アルバム』（平成9(1997)年10月）から採ったもので、同じ場所を昭和30年代と現在とを比較して見せている。つまりは変化を叙述するという手法を画像に与えているのである。同じことを文章で行えるのかといえば、それは無理ということになる。次の図13A・Bは、昭和30(1955)年3月に長野県教育委員会から発行されたもので、1つのモデルとなり得る優れた写真集といえる、「写真信濃風土記」2として発刊された『雪まつり』で、いうまでもなく阿南町新野が舞台になっている。これは発刊前年の昭和29(1954)年に新野で、ある意図をもって写真を撮り、その写真によって暮らしぶりを叙述している。つまり、共時的に生活全体を写真によって資料化して表現したものである。図14は『山に生かされた日々 新潟県朝日村奥三面の生活誌』（「山に生かされた日々」刊行委員会編、昭和59(1984)年12月）から引用したのもので、ダム湖に水没する三面に撮影者が1年住み込んで村人たちの生活をつぶさに撮影して編んだものである。共時的な生活叙述を写真によって行っているのである。

画像資料から民俗を読むといったときに何ができるのかというと、それは、1つには民俗の発見と細部の叙景であり、もう1つは変化の叙景、文章では限界がある景観などの変化を画像によって表現していく、さらにもう1つは、共時的に暮らしのありさまを叙景していく手法で、これは写真民俗誌とも言い得よう。

これらとは異なった手法での、画像資料のもう1つの可能性をあげておくと、柳田が主宰した民俗学研究所が編集して昭和30(1955)年4月に朝日新聞社が発行した『日本民俗図録』の手法があげられる。この書は、主に昭和初期に行われた、所謂山村調査や海村調査、そして戦後の離島調査などによって集められた写真を編集したもので、柳田國男監修となっている。図15にはそのなかの「喪服と新墓」の頁で、ここには点数は少ないものの比較の意図がうかがえる。こうした手法は、主に図版を用いたものだが、同じく民俗学研究所編の『年中行事図説』(昭和28(1953)年刊、昭和50(1975)年10月復刊、岩崎美術社)にもうかがうことができる。ある民俗事象を写真によって全国的に比較することは容易ではなく、先の『日本民俗図録』は、おそらく偶然に撮影されたものを用いているために、その萌芽が見られる程度にとどまっているのである。これに対して、図16にあげた松村利規による「宮崎の精霊棚」<sup>(16)</sup>は、1つの県とはいえ宮崎県内の盆棚を実見しながら写真に撮って歩き、これを用いて比較してみせた論文で、画像資料を用いた優れた論文といえる。この論文で用いている比較写真は、いうまでもなく偶然に撮影されたものではなく、比較を意図して撮られたものである。これを並べていくことによって画像から盆棚の形態が比較ができ、文章では見えてこない新たな問題や特色が明確になっている。

画像資料を用いて対象を比較する場合には、偶然的に撮影された写真では十分ではないことはいうまでもなく、比較すべき基準を定めての撮影が必要になってくる。考古学や民具研究といった物質文化研究では、ものの比較を見据えた撮影基準が議論されているが、静物以外についてはまだ実例が少なく、撮影基準も含めて今後の課題となろう。

本稿で検討したかったことは、さまざまな写真を画像資料として学問的に位置付けていくためには、資料論として議論を行っていくことが必要で、これを踏まえて表現の手段としていかななくてはならないということである。また、資料論として議論することからは、画像がもっている高い学際性が明らかになってくるのであり、それによって資料を基にした新たな学問的なディシプリンを立ち上げていくということが必要ではなからうかということである。

注

- (1) 小川直之「折口信夫のまなざし」(『折口信夫全集月報』22、中央公論社、平成9(1997)年1月)、小川直之「折口信夫研究の資料群」(『日本文学論究』第61冊、國學院大學國文學會、平成14(2002)年3月)などで概要を述べた。
- (2) 池田彌三郎「折口信夫の『古代』 - あとがきにかえて - 」(池田編『講座古代学』中央公論社、昭和50(1975)年3月)で「折口は石の鳥居も石垣も気に入らず、さりとて鳥居はうまく塗りつぶせないで、石垣だけを消してしまったのだ。だからこれは写真とはいえず、けっして実景ではない」、「この修正写真の『たぶの杜』は、いわば折口の心象風景であった」と述べている。
- (3) 新藤健一『新版 写真のワナ』情報センター出版局、昭和59(1984)年4月
- (4) 福田アジオ「日本民俗学研究史年表」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第2集、昭和58(1983)年3月)をもとに作成した。
- (5) 郷土会による内郷村調査については、小川直之「柳田國男と郷土会・内郷村調査」(『國學院大學紀要』第40巻、平成14(2002)年2月)に詳述した。
- (6) 『都市及農村』(洛陽社)の第4巻11号(大正7(1918)年11月)には、柳田國男「村を觀んとする人の為に」、小田内通敏「内郷村踏査記」、石黒忠篤「内郷村の二日」、今和次郎「内郷村にて見たる居住状態」が掲載され、柳田の「村を觀んとする人の為に」は第5巻2号まで4回にわたって連載されている。
- (7) 大正7(1918)年9月8日の「流行会」での発表
- (8) 柳田為正『父柳田國男を想う』(筑摩書房、平成8(1996)年4月)のなかで、柳田は貴族院書記官長退職の記念に写真機

と録音機をもらっているし、ドイツ製のテナックスカメラも持ち、D P 器具一式もあったが、ほとんど使うことがなかったことを述懐している。

( 9 ) 『折口信夫全集』34 巻(中央公論社、平成 10(1998)年 8 月)所収

( 10 ) 福原信三は、「国際サロン鑑査について」(『日本写真会会報』第 2 巻 5 号、昭和 2 (1927)年 5 月)で、「私にとっては光と其諧調が私の魂其のものである」「光と其諧調は福原信三の名によって代表されて居る個性そのものである」などと述べている。「諧調」というのが注目される表現である。

( 11 ) 『折口信夫全集』34 巻(中央公論社、平成 10(1998)年 8 月)所収

( 12 ) 矢野敬一「戦前における映像メディアと『郷土』の表象 - 熊谷元一『会地村 - 農村の写真記録』と民俗学 - 」『日本民俗学』235 号、日本民俗学会、平成 15(2003)年 8 月

( 13 ) 小川直之「折口信夫のまなざし」(『折口信夫全集月報』22、中央公論社、平成 9 年(1997)年 1 月)、小川直之「折口信夫研究の資料群」(『日本文学論究』第 61 冊、國學院大學國文学會、平成 14 年 3 月)

( 14 ) 学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用に関する基礎的研究」によるシンポジウム「画像資料と近代生活誌」、平成 13(2001)年 12 月 8 日

( 15 ) 初版は昭和 41(1966)年から角川書店によって刊行され、昭和 59(1984)年 8 月に神奈川大学日本常民文化研究所の編集で平凡社から改訂新版が刊行されている。

( 16 ) 松村利規「宮崎の精霊棚」『民具研究』第 120 号、日本民具学会、平成 11(1999)年 10 月

表2 民俗学系学術雑誌・研究書収録写真一覧（大正7（1918）年8月～昭和5（1930）年6月） ※写真表題欄の●は表題が銘記されていないもの

写真表題	撮影者	著者	論文名・書名	雑誌・巻号	発行年月	西暦年月	掲載頁	その他
獅子踊り(陸中遠野)	ねふすきい	岡本彦七	表紙	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	表紙	
第一図(七いしがく)		佐々木喜善	『たいがく研究』	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	10	
(おいらさま)		佐々木喜善	『おいら神異聞』	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	21	
(おいらさま)		佐々木喜善	『おいら神異聞』	『土俗と伝説』1-1	大正7年8月	191808	23	
おぼすけ(大助)人形		ネフスキー	表紙	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	表紙	
(まじない)人形		ネフスキー	『遠野のまじない人形』	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	15	
(まじない)人形		ネフスキー	『遠野のまじない人形』	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	16	
(まじない)人形		ネフスキー	『遠野のまじない人形』	『土俗と伝説』1-2	大正7年9月	191809	16	
かくらさま 陸中遠野		ネフスキー	表紙	『土俗と伝説』1-3	大正7年10月	191810	表紙	
(たいがく)		岡本彦七	『たいがくの研究』2	『土俗と伝説』1-3	大正7年10月	191810	13	
三社田楽 東京浅草		高柳光寿	表紙	『土俗と伝説』1-4	大正7年11月	191811	表紙	
第一図(びんざさら)		高柳光寿	『びんざさら祭り』	『土俗と伝説』1-4	大正7年11月	191811	38	
第三図(びんざさら)		高柳光寿	『びんざさら祭り』	『土俗と伝説』1-4	大正7年11月	191811	38	
(重軽石・カ石)		本山桂川	『重軽石とカ石』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	150	
第一図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	167	
第二図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	168	
第三図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	168	
第四図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	169	
第五図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	170	
第六図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	170	
第七図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	171	
第八図		小牧実繁	『北陸地方に於ける漁民の季節的移動に関する報告』	『民族』1-1	大正14年11月	192511	172	
第一図 成廣澳ベシュレンにある石造物		鳥居龍蔵	『台湾の古代石造遺物に就て』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	123	
第二図 成廣澳ベシュレンにある石造物		鳥居龍蔵	『台湾の古代石造遺物に就て』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	124	
第三図 草間に露出する石造物		鳥居龍蔵	『台湾の古代石造遺物に就て』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	125	
モールス先生(大正十四年一月撮影)		松村 暁	『モールス先生の人類学上に於ける功績』	『民族』1-3	大正15年3月	192603	142	
第一図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	3	
第二図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	4	
第三図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	5	
第四図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	6	
第五図		原田淑人	『楽浪の画像専』●	『民族』1-4	大正15年5月	192605	7	
殷墟小屯子村落北方		浜田青陵	『殷墟の白色土器』	『民族』1-4	大正15年5月	192605	104	
殷墟発見白色土器 京都帝国大学蔵		浜田青陵	『殷墟の白色土器』	『民族』1-4	大正15年5月	192605	105	
勳黒色雷紋土器(上) エウモルフオブローロス氏所蔵		浜田青陵	『殷墟の白色土器』	『民族』1-4	大正15年5月	192605	107	
北方文明研究会小集		内藤吉之助	『兎戯と法制史』	『民族』1-5	大正15年7月	192607	112	
パツテルハイム記念碑除幕式		赤松秀景	『Hautes Etudes』	『民族』1-5	大正15年7月	192607	130	
支那発見彩色土器(京都帝国大学蔵)		浜田青陵	『漢式の彩色土器』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	84	
満州蘆家屯 墓発見彩色土器(京都帝国大学蔵)		浜田青陵	『漢式の彩色土器』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	84	
支那発見磨研模様土器(京都帝国大学蔵)		浜田青陵	『漢式の彩色土器』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	89	
●		長山源雄	『香掛の風習』	『民族』1-6	大正15年9月	192609	154	

これは神の御座の入口なる奥の六脚神門の前に額突いて雨乞ひの熟袴を擧げてゐるところ。ここは巫女達の折廻する所で、一般人の礼拝する所はこの前面の一棟である					「鳩間島記事」	『民族』2-1	大正15年11月	192611	151	
大正12年旧八月七日の雨乞ひの時、友利御嶽の神木清葉(斜)に尻ゆるが其幹の下で撮す。前列白衣、頭に長簪を頂ける四人が巫女、後の男が総代の大工恵理君、石垣の内は神の御座である。		宮良当壮		「鳩間島記事」		『民族』2-1	大正15年11月	192611	152	
第一図		喜田貞吉		「東北石器と支那文化」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	4	
第二図		喜田貞吉		「東北石器と支那文化」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	7	
第三図		喜田貞吉		「東北石器と支那文化」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	8	
上図は戸金の神楽 幕の舞 才藏は多田翁		早川孝太郎		「三州戸金の神楽村及び神楽の才藏のこと」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	153	
下図は戸金神楽の才藏多田愛之助		早川孝太郎		「三州戸金の神楽村及び神楽の才藏のこと」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	153	
●		橋浦泰雄		「五島の鬼の火」	『民族』2-2		昭和2年1月	192701	195	
(法然上人絵伝から)第2図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	6	
(文永賀茂祭草子から)第3図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	7	
(春日験記一七から)第4図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	8	
(融通念仏縁起下から)第5図		高橋健自		「直垂の起原」	『民族』2-3		昭和2年3月	192703	8	
●		藤木喜久麿		「新島に於ける子守のこと」	『民族』2-4		昭和2年5月	192705	167	
●		藤木喜久麿		「新島に於ける子守のこと」	『民族』2-4		昭和2年5月	192705	168	
●		宮良当壮		「石垣島のミンサー」	『民族』2-4		昭和2年5月	192705	178	
周防国吉敷郡下宇野合村養福巴形銅器(約二・五分一丈)(東京帝室博物館蔵)		津田敬武		「太陽崇拜と宗教観念の発達」	『民族』2-5		昭和2年7月	192707	4	
池城墓の外景	島袋源七	伊波普猷		「南島古代の葬儀」	『民族』2-5		昭和2年7月	192707	18	
池城墓の内部	島袋源七	伊波普猷		「南島古代の葬儀」	『民族』2-5		昭和2年7月	192707	20	
●		清野謙次		「日本石器時代に関する考察」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	9	
第一図 敦煌出土漆杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	46	
第二図 内蒙古肯特山出土漆杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	46	
第三図 遼陽出土土杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	48	
第四図 秦浪遺跡出土漆杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	49	
第五図 内面漆塗銅杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	50	
第六図 秦浪遺跡出土青銅杯		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	51	
第七図 武氏前石室画像第七石		原田淑人		「支那杯の器形と用途とについて」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	52	
第一図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	71	
第二図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	71	
第三図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	73	
第四図 魏子高発見彩色土器		浜田青陵		「魏子高の土器」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	73	
第一図 魏子高遺跡全図	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	80	
第三図 日地点発掘風景	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	85	
第四図 ■複原	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	86	
第五図 単 ■子発見	島田貞彦	島田貞彦		「魏子高遺跡発掘記」	『民族』2-6		昭和2年9月	192709	89	
●		清野謙次		「北海道東北部に於ける人類学的探究紀行」	『民族』3-1		昭和2年11月	192711	114	
●		ネフスキ		「故シユルンベルグ氏一真小伝と著作」	『民族』3-2		昭和3年1月	192801	101	

●				岡 正雄	「故ハートランド博士の小伝及著作考」	『民族』3-2	昭和3年1月	192801	107
●				清野謙次	「北海道東北部に於ける人類学的探究紀行」	『民族』3-2	昭和3年1月	192801	121
	ハリハリ踏実写			永田衛吉	解説	『民俗芸術』1-1	昭和3年1月	192801	口絵
	翁の仮面(京都王生寺所蔵)					『民俗芸術』1-1	昭和3年1月	192801	32
	花田植に出る采振り(九才より十四才位までの少女がなる)			安佐郡安村農会	「広島県安佐郡の花田植」	『民俗芸術』1-1	昭和3年1月	192801	86
	松ヶ崎題目額(写真展覧会出品の中より)			涌泉寺 深見耀宏	解説	『民俗芸術』1-2	昭和3年2月	192802	口絵
	淡路三條の人形芝居秀術館の段(展覧会出品の中より)					『民俗芸術』1-2	昭和3年2月	192802	22
	新野伊豆神社お牛(展覧会出品の中より)					『民俗芸術』1-2	昭和3年2月	192802	58
	鳳来寺田楽萬歳楽(展覧会出品の中より)					『民俗芸術』1-2	昭和3年2月	192802	58
	花園村梁瀬の御田(展覧会出品の中より)					『民俗芸術』1-2	昭和3年2月	192802	75
	第三十五座の大蛇退治			小寺融吉	「秋父神楽と秋父人形の解説」	『民俗芸術』1-2附録	昭和3年2月	192802	3
	熊谷籠騷動継子責の場			小寺融吉	「秋父神楽と秋父人形の解説」	『民俗芸術』1-2附録	昭和3年2月	192802	4
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	88
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	71
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	72
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	73
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	73
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	74
				原田淑人	「漢代の軸陶俑」	『民族』3-3	昭和3年3月	192803	74
				小田内通久	解説	『民俗芸術』1-3	昭和3年3月	192803	口絵
	豊橋神明社鬼祭の中(御神楽)					『民俗芸術』1-3	昭和3年3月	192803	40
	鳩間ぶし				解説	『民俗芸術』1-4	昭和3年4月	192804	口絵
	鷲の島しぶ			宮当壮	「八重山の鷲の歌」	『民俗芸術』1-4	昭和3年4月	192804	21
	あまがは踊			宮当壮	「八重山の民謡」	『民俗芸術』1-4	昭和3年4月	192804	69
	ゑんぶり			中漣 等	「奥州八戸の舞踊『ゑんぶり』略解」	『民俗芸術』1-4	昭和3年4月	192804	73
	青柴垣神事巫女下船			社務所	「美保神社青柴垣神事」	『民俗芸術』1-4	昭和3年4月	192804	81
	かざなおりと金花箸 奄美大島の祝女の用ゐるもので、左の3つはかざなおり、右の1つは金花箸			伊波普猷	「かざなおり考」	『民族』3-4	昭和3年5月	192805	115
	壬生狂言炮烙割り			永田衛吉	解説	『民俗芸術』1-5	昭和3年5月	192805	口絵
	挿図A 黒谷上人絵伝(神戸川崎男爵家蔵)			岩橋小弥太	「花田植の写真を観て」	『民俗芸術』1-5	昭和3年5月	192805	13
	第二図・民家を利用せる一例(一)			小田内通久	「八王子車人形の話」	『民俗芸術』1-5	昭和3年5月	192805	55
	第三図・民家を利用せる一例(二)第二図の見取図			小田内通久	「八王子車人形の話」	『民俗芸術』1-5	昭和3年5月	192805	59
	琉球古劇「花売の縁」主人公森川子に扮したる名優新垣松善			伊波普猷	解説	『民俗芸術』1-6	昭和3年6月	192806	口絵
	布さらし節			柳田國男	「島の歴史と芸術」	『民俗芸術』1-6	昭和3年6月	192806	9
	父尉(日光作大西亮太郎氏蔵)			山崎栄堂	「申楽の翁」	『民俗芸術』1-6	昭和3年6月	192806	46
	延命冠着(文蔵作金剛謹之助氏蔵)			山崎栄堂	「申楽の翁」	『民俗芸術』1-6	昭和3年6月	192806	47
	奠鷹用木馬二種 京城帝国大学民俗参考品室所蔵			秋葉 隆	「奠鷹考」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	65
●				清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	88
●				清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	90

●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	92
●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	93
●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	93
●		清野謙次	「扶餘の旧都」	『民族』3-5	昭和3年7月	192807	94
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』3-6	昭和3年9月	192809	154
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』3-6	昭和3年9月	192809	154
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』3-6	昭和3年9月	192809	158
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』4-1	昭和3年11月	192811	135
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』4-1	昭和3年11月	192811	135
●		清野謙次	「伯耆出雲より周防へ」	『民族』4-1	昭和3年11月	192811	137
●		小泉 鐵	「シーバウ社の記録」	『民族』4-2	昭和4年1月	192901	135
●	三河砥神社の田遊祭		解説	『民俗芸術』2-1	昭和4年1月	192901	口絵
●	御祭用具廃物利用の一例 図師嘉彦	図師嘉彦・井上 錦明	「庭飾と注連」	『民俗芸術』2-1	昭和4年1月	192901	10
●	黒鳥どき		解説	『民俗芸術』2-2	昭和4年2月	192902	口絵
●	高砂そうたい	西角井正慶	「万作芝居の話」	『民俗芸術』2-2	昭和4年2月	192902	36
●	広い大寺	西角井正慶	「万作芝居の話」	『民俗芸術』2-2	昭和4年2月	192902	39
●	シビリヤでれる国民の刺縫		解説	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	口絵
●	第二図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	2
●	第三図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	3
●	第九図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	10
●	第十図	図師嘉彦	「見世物小屋に就いて」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	10
●	シビリヤ西部かちんつ国民の夜の遊戯				昭和4年3月	192903	26
●	細田川	西角井正慶	「万作芝居の話」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	50
●	たぶと権との杜	坪井忠彦	「尾張岩塚のつうくろ祭」	『民俗芸術』2-3	昭和4年3月	192903	76~79
●	辺戸名のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	巻頭
●	国頭村辺戸の神人	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	64~65
●	久高島久高のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	64~65
●	久高島久高のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	80~81
●	摩文仁のろ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	96~97
●	八重山大阿母	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	96~97
●	だいがく	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	304~305
●	花祭りの翁(豊根村上黒川)	故千家経麻呂	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	514
●	門神社(下伊那・北設楽)	早川孝太郎	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	607
●	あかたび(たぶ)能登一の宮	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	608~609
●	ひらたび おたび様(塚)	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	608~609
●	めたび(俣袴肉桂たび)	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	608~609
●	早処女(羽後飽海郡女鹿)	宮本勢助	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	619
●	丘のたぶ	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	624~625



花舞ひ・森の手	故千寮経麻呂	折口信夫	『古代研究』民俗学篇1		昭和4年4月	192904	632
八百比丘尼	穂積忠	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
久高島外間のろ	折口信夫	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
久高島外間のろ	折口信夫	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
漂著神を祀ったたぶの杜		折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
岬のたぶ		折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
あかたび(二)		折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
さいの神	穂積忠	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
さいの神	穂積忠	折口信夫	『古代研究』国文学篇		昭和4年4月	192904	口絵
第一図	金関丈夫・田幡丈夫	金関丈夫・田幡丈夫	『アイヌ婦人の頭部変形(就て)』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	42
第一図 コリヤークシャマン	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	66
第二図 ヤクトシヤマン 前面 背面	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	67
第三図 Bエニセイシャマンの上衣	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	69
第四図 ソヨシヤマン(前面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	71
第五図 ソヨシヤマン(背面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	71
第六図 カラガスシヤマン(前面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	73
第七図 カラガスシヤマン(背面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	73
第八図 ゴールドシヤマン 前面	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	74
第九図 Bエニセイシャマンの長靴	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	77
第十図 アルタイシヤマンの前面	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	79
第三十四図 エニセイシャマンの円形太鼓(表面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	88
第三十五図 エニセイシャマンの円形太鼓(裏面)	関下大慧	関下大慧	『シャマンの服装と持物とその意味』	『民族』4-3	昭和4年4月	192904	88
文楽座の薪口村の舞台面			解説				口絵
鳥取の流し雛(土の頭・紙の衣裳)	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	8
紀州湯川明神の人形	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	9
●	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	14
八王子の車人形(日向景清矢島日記)	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	24
秩父人形 意の菓子別れ	柳田國男	柳田國男	『人形とオシラ神』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	25
日向岩川八幡の大人弥五郎	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	31
七尾の山車人形	折口信夫	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	36
陸中の草人形	にこらい・ねぶすき	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	37
まじない人形		折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	38
まじない人形		折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	39
陸中遠野のおひら様	にこらい・ねぶすき	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	52
武蔵西多摩のおひら様	村上清文	折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	53
薩摩雑(帝室博物館蔵)		折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	55
三河雑(帝室博物館蔵)		折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	55
元禄時代の立雛(帝室博物館蔵)		折口信夫	『偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	56
淡路地方の伝説による百太夫の図	吉井太郎	吉井太郎	百太夫考	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	70
百太夫社(向つて右)	吉井太郎	吉井太郎	百太夫考	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	71
淡路若屋神社に於ける人形操の光景(太閤記)		鷲尾正久	『西宮人形座の餘蘊』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	74
人形吉遺品 八重垣姫		鷲尾正久	『西宮人形座の餘蘊』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	76
人形吉所可さね		鷲尾正久	『西宮人形座の餘蘊』	『民俗芸術』2-4	昭和4年4月	192904	77

ピラのいろいろ				「日本と欧州の系図」		192904	89
結城孫三郎一座晝飯の舞台面				「日本と欧州の系図」		192904	90
正チャンの冒険						192904	92
古代イタリーの人形				「我偶人劇の世界的地位と其特色」		192904	98
セイロンの操り人形				「我偶人劇の世界的地位と其特色」		192904	103
ジャバの影絵				「我偶人劇の世界的地位と其特色」		192904	106
支那の影絵				「我偶人劇の世界的地位と其特色」		192904	108
吉田冠十郎の車人形松王丸				「我偶人劇の世界的地位と其特色」		192904	111
文楽座の八百屋お七(吉田文五郎)				「我偶人劇の世界的地位と其特色」		192904	114
秩父人形の骨組				「人形と人形つかひ」		192904	132
心中天網島の舞台面				「人形と人形つかひ」		192904	156
第二回				「佐渡のノロマ人形の機構」		192904	166
第四回				「佐渡のノロマ人形の機構」		192904	170
第五回				「佐渡のノロマ人形の機構」		192904	171
吉田の足				「秩父に於ける人形芝居」		192904	182
吉田の首				「秩父に於ける人形芝居」		192904	183
秩父人形の衣裳				「秩父に於ける人形芝居」		192904	185
秩父人形の頭				「秩父に於ける人形芝居」		192904	186
カラクリ				「秩父に於ける人形芝居」		192904	188
鳴門のお鶴				「安房平群の人形芝居」		192904	191
巡礼とばらの舞台面				「花やしきの糸あやつり」		192904	198
松根義雄氏				「花やしきの糸あやつり」		192904	199
車人形の三番叟				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	219
人形の頭一				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	220
人形の頭二				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	221
写し絵の機械				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	222
写し絵の原画				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	223
結城孫三郎のうし絵 舌切雀の原画				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	224
結城孫三郎一座の写し絵				「玉川文楽の車人形と写し絵」		192904	225
京都團圓堂狂言(でんでん虫)				解説		192905	口絵
日向の臼太鼓踊り				解説		192906	口絵
大久保踊小道具				「採集図」		192906	7
日向片湯郡の臼太鼓踊				「採集図」		192906	10
京都六斎念仏小道具				「採集図」		192906	16
六斎念仏の獅子頭				「採集図」		192906	22
図版第四 和野野川大入川奥地 長野県下伊那郡大下條村早稲田 愛知県北設楽郡豊根村小田第一二回 舞戸飾付け(振草系中在家)				『花祭』前編		193004	20~21
第一七回 花の舞のちほや(振草系月)				『花祭』前編		193004	66
図版第九 さざちの各種				『花祭』前編		193004	71
図版第十 花の舞(下黒川)				『花祭』前編		193004	90~91
図版第十 高橋文太郎 昭和4年1月				『花祭』前編		193004	96~97
図版第十 さかきともし(御園)				『花祭』前編		193004	96~97
第二七回 「つじがため」の一形式(大入系御園)				『花祭』前編		193004	98

図版第十一 高嶺祭りの棚	早川孝太郎 昭和4年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	100～101
図版第十一 つじがためのお供物(足込)	早川孝太郎 昭和5年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	100～101
第三六図A まつりの場所(大人系上黒川にて)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	132
第三六図B 舞ひを待つ間(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	132
図版第十二 鬼の舞(祭具は各所取合せ製作せるもの)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	134～135
図版第十二 北設楽郡園村足込の一農家写生		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	134～135
図版第十四 さかきの舞ひ(下津具)	早川孝太郎 昭和3年2月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	172～173
図版第十四 やまみ・さかき・伴鬼((白))	早川孝太郎 昭和4年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	172～173
第五八図 地固めの舞の一形式(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	187
第六二図 「三ツ舞扇の手」おしめこし(振草系中在家)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	194
第八一図 花の舞「ひらき」の型(大人系上黒川)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	213
第八二図 三ツ舞扇の手(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	215
図版第二 扇の手	早川孝太郎 昭和3年2月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	224～225
図版第二 扇の手背部(下津具)	早川孝太郎 昭和3年2月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	224～225
第九一図 湯ばやしの舞(振草系中在家)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	228
第九三図 「さかき」の場面(振草系月)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	233
第九七図 伴鬼の一種(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	236
第一〇二図 「やまみ」の舞の型(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	241
図版第二四 面を著ける		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
図版第二四 面を著ける		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
図版第二四 さかきの五方見		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
図版第二四 面を持ちて		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	244～245
第一〇五図 「さかき」の出の型(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	245
第一〇七図 「さかき」の後姿(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	246
第一一〇図 「さかき」へんべの型(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	250
第一二〇図 右よりしをふき みそぬり ひのねぎ おかね(振草系足込)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	267
第一二六図 「もどき」役(振草系古戸)		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	286
図版第二七 北設楽郡園村足込		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	424～425
図版第二七 振草たがね峠の中途		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	424～425
第一三〇図 園村足込の「みやうど」屋敷		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	431
図版第二八 本郷		早川孝太郎	『花祭』前編		昭和5年4月	193004	436～437

図版第二八 御殿山遠望			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	436～437
第一一三 一 図 下川村下田			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	446
第一一三 二 図 振草村神田にて			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	449
図版第二九 さかき		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	456～457
図版第二九 さかき裏面(古戸)天地一尺四寸		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	456～457
第一一三 三 図 振草系中在家の面			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	468
第一一三 七 図 右より茂吉 伴鬼(大入系御園)			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	473
第一一四 七 図 I 「やまわり」 II 「さかき」(振草系足込)			早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	481
図版第三二 才次(古真立)天地一尺二寸		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	486～487
図版第三二 茂左衛門(古真立)天地一尺三寸二分		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	486～487
図版第三三 さかき(古真立)		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	500～501
図版第三三 やまみ(古真立)		早川孝太郎 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	500～501
図版第三四 さかき・やまわり		佐々木嘉一 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	502～503
図版第三四 さかき・やまわり 裏面(中在家)		佐々木嘉一 昭和15年1月	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	502～503
図版第三五 1 中央藤田彦(旧さかき) 右須佐之男命(旧やまわり) 左茂吉 2 右ヨリ ひのねぎ おきな・みこ 3 しづめ 4 伴面(中設楽)		岡田松三郎	早川孝太郎	『花祭』前編		昭和15年4月	193004	504～505
図版第一 ゆはぎの一種(古戸)			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	巻頭
図版第二 神楽屋敷と古戸の部落 上 中央高所にあるが神楽屋敷 其上段杉の立てるは「みるめ」の祠(古戸)		早川孝太郎 大正15年11月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	6～7
図版第二 神楽屋敷と古戸の部落 下 古戸字下古戸		早川孝太郎 昭和2年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	6～7
第三 図 竹内吉郎次氏			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	19
図版第三 神楽伝法書 神楽口伝書(古戸佐々木充爾家蔵)			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	22～23
図版第四 神下し行列と御神楽の面 上 北設楽郡富山村河内諏訪神社(御神楽神渡り)		作者不明 昭和2年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	176～177
図版第四 神下し行列と御神楽の面 下 北設楽郡富山村 大谷龍野神社御神楽の面(上段右ヨリ 鬼神・兄弟鬼 中段右ヨリ 禰宜・はなうり 下段 右ヨリ 風ふく・みこ)		早川孝太郎 昭和2年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	176～177
図版第五 西浦の部落 上 西浦鞆音堂より東方部落を望む		早川孝太郎 昭和3年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	206～207
図版第五 西浦の部落 下 はだれの山(西浦鞆音堂を主題に製作せるもの)		早川孝太郎 昭和3年1月	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	206～207
第二三 図 別当屋敷の「おとこ木」(西浦田楽)			早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	232

図版第六 西浦田楽 上 庭ならしの前 図版第六 西浦田楽 下 くらま天狗(長刀を持て るが弁慶)	早川孝太郎 昭 和3年2月 早川孝太郎 昭 和3年2月	早川孝太郎 早川孝太郎 早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編 『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月 昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004 193004 193004	234~235 234~235 311 312~313
第三〇図 黒倉田楽舞台 図版第七 黒倉田楽の面 下段右ヨリ ささら・鈴・ はやし面・獅子・駒 図版第七 黒倉田楽の面 上段右ヨリ 一の鍵取 り・松風丸・四寸の鍵取り・太郎鬼・次郎鬼・茂吉 鬼	早川孝太郎 大 正15年11月 早川孝太郎 昭 和2年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004 193004	316~317 316~317 380~381
図版第八 段戸山と栢立の部落 上 三河北設楽 郡振草村塚石峰より西方段戸山を望む 図版第八 段戸山と栢立の部落 下 三河北設楽 郡段續村折立部落 図版第九 古戸田楽の面(一) 上 かんの人(天 地一尺)	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	380~381 380~381
図版第九 古戸田楽の面(一) 下 くにしげもどき (右 天地六寸五分 左 五寸八分)文化八年巳正 月氏子古次郎作の銘あり	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	389
第三七図 笹竹政十氏(古戸田楽)	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	402~403
図版第一〇 古戸田楽の面(二) 上 右ヨリ a不 明 bみややならし cはねひろ太夫 図版第一〇 古戸田楽の面(二) 下 上段右ヨリ 1不明 2せんだの尉の婆 3不明 下段右ヨリ 1 不明 2堂めぐり 3なりひら	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	402~403 406~407
図版第一一 古戸田楽面(三) 上 鶴頭(左右一 尺一寸五分) 図版第一一 古戸田楽面(三) 下 右ヨリ ab不 明 cもちあぶり	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	410 410~411
第四五図 和尚の衣を着た佐々木氏(古戸田楽)	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	410~411
図版第一二 古戸田楽の面(四) 上 向ッテ 右・ おきな 左・さんばそ 図版第一二 古戸田楽の面(四) 下 向ッテ 右・ みこ 左・しづめ	早川孝太郎 昭 和5年1月 早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎 早川孝太郎	『花祭』後編 『花祭』後編	昭和15年4月 昭和15年4月	193004 193004	532 540 552 568~569
第四六図 円谷狂言の伝承者瀧美利三郎氏と猿 面	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	568~569
第四七図 田峰観音舞台	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	570
第四八図 狂言舞台北設楽郡本郷町	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	587
図版第一三 念仏踊り 上 道行き	原田清 昭和3年	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	589
図版第一三 念仏踊り 下 おかさき(本郷町三ツ 瀬)	原田清 昭和3年	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	590~591
第五三図 鳳来寺下の舞台(金剛堂)跡	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	587
第五七図 粟代石仏	早川孝太郎 昭 和5年1月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	589
図版第一四 獅子舞 上 獅子舞(幕を持つは才 蔵)	早川孝太郎 大 正15年10月	早川孝太郎	『花祭』後編	昭和15年4月	193004	590~591

図版第一四 獅子舞 下 おかめの舞(共に戸金神楽組)	早川孝太郎 正15年10月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	590~591	
第六四図 ござへい餅(足込花祭りにて)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	628	
図版第一五 松飾りと餅花 上 松飾り(最も近代化であるもの)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	628~629	
図版第一五 松飾りと餅花 下 餅花(長野県下伊那郡巨祖村新野)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	628~629	
図版第一六 墓地と「はざ」上 塚ごはざ	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	642~643	
図版第一六 墓地と「はざ」下 墓地とたっしや木(長野県下伊那郡巨祖村新野)	早川孝太郎 正15年1月	大	早川孝太郎	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	642~643	
第六七図 古真立の面 左ヨリ婆・「みこ」・爺	故千家経麻呂		折口信夫	『花祭』後編		昭和15年4月	193004	644	
朝鬼(又、四つ鬼)(豊根村上黒川)	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	644	
北設楽の村	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	644~645	
北設楽の村	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	644~645	
にう木の一例(下伊那新野)	早川孝太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	646	
おしらすさま(陸中遠野)	ねふすきい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	706	
王護の五郎あごかけ(巨人譚の印象)	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006		
師の房(田川村諸吉の福順)	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	768~769	
春岐の住宅の型	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	768~769	
納屋(右)・牛屋	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	780	
対馬の「やぼさ」	後藤守一		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	784~785	
大人弥五郎 大隅岩川八幡宮祭礼の節うつす	折口信夫		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1052~1053	
七尾の山車人形(一)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1057	
七尾の山車人形(二)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1058	
七尾の山車人形(三)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1059	
てすり及びびみづひぎの例(一) 上村(淡路)源之丞一庵	吉井太郎		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1060	
てすり及びびみづひぎの例(二) 八王寺車人形			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1061	
陸中の草人形	にこらい・ねふす せい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1065	
まじなひ人形	にこらい・ねふす せい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1066	
まじなひ人形	にこらい・ねふす せい		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1067	
鳥取の流し雛(土の頭・紙の衣裳)			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1086	
紀州湯川 明神の人形			折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1087	
武蔵西多摩のおひら様	村上清文		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1088	
南多摩元八王寺村字八幡宿下庭場 蚕日待のオシラ様の御表具(古)	村上清文		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1090	

南多摩元八王寺村字八幡宿下庭場 蚕日待のオシラ様の御表具(新)	村上清文	折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1091	
八王寺市外小宮村字西中野 蚕日待のおしら様の御表具	小池・村上	折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1092	
薩摩鎌(帝室博物館蔵)		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1094	
三河鎌(帝室博物館蔵)		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1095	
元禄時代の立ち鎌(帝室博物館蔵)		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1096	
壬生念仏の古面		折口信夫	『古代研究』民俗学篇2		昭和15年6月	193006	1098~ 1099	



図1 『土俗と伝説』  
第1巻1号・2号表紙

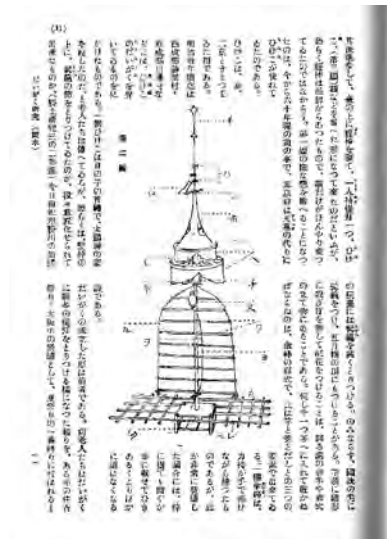


図2 岡本彦七「だいがくの研究」  
に掲載された「だいがく」  
の写真と図  
(『土俗と伝説』第1巻第1号)

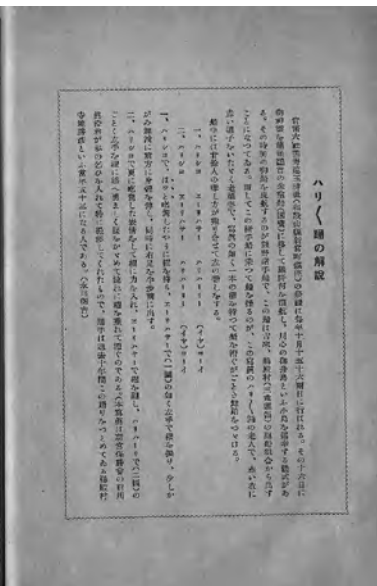


図3 『民俗芸術』第1巻第1号  
の口絵と解説







73  
 燈・油燗木 山崎長老の  
 家の裏、大きいかまどが架か  
 れており、その上に釜がのっ  
 ている。この釜は花の実を煎  
 る為のものと思われる。山崎  
 には熊鷹八幡とよばれる神社  
 があり、その神柱に仕える神  
 入達は、その初め神燈の油を  
 しばっていたが、後にはその  
 油を各地に行商するようにな  
 り、大山崎の油師の名は中  
 世にあつては西日本をひろく  
 知られた。油の原料になるも  
 のは荏胡麻の実であり、荏は  
 近江から奥濃へかけて多く産  
 出した。大山崎で油の製造が  
 盛になるとその方面から盛に  
 荏をもって来て油に練めた。  
 まず荏の實をつきつぶし、そ  
 れを籠にいれて漉るか、また  
 はこしきで篩すのであるが、この図では篩つたようである。そして油がにじみ出るようになると油  
 燗木にかける。右下の木は竹燗木である。上側の角棒をぬくと下側の角棒の中央が下へふくら  
 んでいるところは中がほりくぼめてあり、そこへ焙った荏の実をふくろに入れてたものをおき、上の角  
 棒をさしこみ、2本の柱の外側、角棒の上側のところへ楔をうちこみ、しめつけると、くぼみに入  
 れられた空は圧縮せられ、油が出てくる。その油は燗木のふくらみの下部に穴がけられていて、  
 そこから流れ出るようになっている。

① 瓜をもく女	7 籠	13 釜のふた
2 釜 架	8 瓜	14 かまど
3 おはくろ	9 竹燗木	15 鉄
4 小 袖	10 こしかけ	16 たきぎ
⑤ 神柱にする	11 竹の柱	17 板 塼
6 燈	12 釜	18 板塼の柱

図6 『絵巻物による日本常民生活絵引』の図と解説



104  
**山村の畑**

北上山麓の奥山村の山村の畑の様子。畑を耕す手  
 づからみるみるが、田舎の山村の風景である。  
 畑の風景は、人々の生活と密着している。畑の  
 風景は、山村の風景の中心である。畑の風景は、  
 山村の風景の中心である。畑の風景は、山村の  
 風景の中心である。畑の風景は、山村の風景の  
 中心である。畑の風景は、山村の風景の中心  
 である。畑の風景は、山村の風景の中心であ  
 る。畑の風景は、山村の風景の中心である。  
 ① 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ② 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ③ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ④ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑤ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑥ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑦ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑧ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑨ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑩ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑪ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑫ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑬ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑭ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑮ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑯ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑰ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑱ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑲ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ⑳ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉑ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉒ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉓ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉔ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉕ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉖ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉗ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉘ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉙ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉚ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉛ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉜ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉝ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉞ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㉟ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊱ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊲ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊳ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊴ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊵ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊶ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊷ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊸ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊹ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊺ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊻ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊼ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊽ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊾ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。  
 ㊿ 少年 大人と肩を組んで、学校の子供達のよう  
 な姿で畑を耕している。

図7 須藤功編『写真でみる日本生活図引』第1巻の「山村の畑」



52 戦時中 昭和35年(1960) 佐藤久太郎撮影



52 戦時中 昭和35年(1960) 佐藤久太郎撮影

① 軍用文字 (ペン) ② 小銃の照準器 ③ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ④ 小銃の照準器 ⑤ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑥ 小銃の照準器 ⑦ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑧ 小銃の照準器 ⑨ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑩ 小銃の照準器 ⑪ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑫ 小銃の照準器 ⑬ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑭ 小銃の照準器 ⑮ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る

① 軍用文字 (ペン) ② 小銃の照準器 ③ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ④ 小銃の照準器 ⑤ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑥ 小銃の照準器 ⑦ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑧ 小銃の照準器 ⑨ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑩ 小銃の照準器 ⑪ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑫ 小銃の照準器 ⑬ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る ⑭ 小銃の照準器 ⑮ 銃口のバツンが弱くおぼろげに映る

図8 須藤功編『写真でみる日本生活図引』第1巻の「昼どき」



写真53 お慰いを受ける兵士たち (昭和17(1942)年頃・東山区八坂神社)

① 晴帽 ② 外被 ③ 外巻 ④ 袴のう この中には着替え用褲袴(シャツ)「板格下」枚履下足「手拭兼唐タワシ洗面袋(浴用石鹸洗滌石鹸用ブラシ洗脚粉)手入袋(はき

みナイフ糸巻きと剣) 運糧帳(便箋のこと)そして 教諭日誌・参謀日誌・作戦要務令・教練規定・射撃教範・ガス防護教範・観測手帳・野戦築城教範などの典拠類が入る。ちなみに、兵卒の背のうは右翼将校は革製。 ⑤ 銃帽 ⑥ はんどごう ⑦ 弾薬箱 60発入り。写真では見えないが前には30発入りの弾薬箱を2つ付けている。 ⑧ 教諭 番書に下げる。(以上「戦争案内」) ⑨ お慰いをする神官 ⑩ 千人針が その能写真には見えないが各自「慰問票」と呼ばれる、数字が押印された高麗紙を、体に纏めてくりつけていた。慰問票の番号は、各自の慰問番号で、死体が残らないくらいに傷を達したとしても、本人の死を確認できるように装飾が義務づけられた。



写真54 戦地での慰問団 (昭和15(1940)年4月19日・撮影場所不明)

① 舞台 丸太を組んで仕上げる。資の子を敷き、その上にむしろを敷いて仮設の舞台としている。 ② ゴザ ゴザの上に座って見守る兵士たち。兵士たちの服装は、軍衣に軍帽という正装。 ③ 椅子 上官のためのものか。空席が目立つ。 戦地に赴いた。

図9 京都市文化財保護課『一枚の写真 - 近代京都庶民生活写真引き - 』



暮らしのアルバム

**①** 明治末期に撮影された山北町商賣町の様子。松田町の商賣町並の縮小版による。

**②** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**③** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**④** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**⑤** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**⑥** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**⑦** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**⑧** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**⑨** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

**⑩** 馬に牽かれた二輪の荷車。荷車そのものを同力と称することも多い。その時、牛を使い始める。牛馬力と呼ぶようになる。内容物に分からないが牛馬力と呼ぶのである。

暮らしのアルバム



**①** 炭焼きと炭依頼。以下、三浦、南水田には炭焼きが盛んで、多くの炭坑があり、炭坑会社も数多くあった。上の写真は、昭和二十三年一月の炭坑労働者の労働風景。これは昭和二十六年一月五日、日本人の炭坑での労働風景である。

**②** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**③** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**④** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**⑤** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**⑥** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**⑦** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**⑧** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

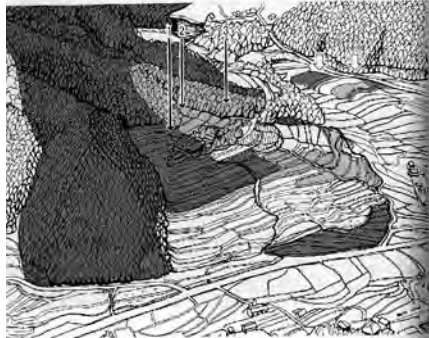
**⑨** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

**⑩** 炭坑。炭坑は人目より奥の方へ行く。海沿いの石を丸く積み重ねて炭坑を築き、土を積み上げて奥の方へ行く。

図10 『山北町史』別編民俗の「暮らしのアルバム」



写真85 山北町大町の山を背景の山。本文参照。(1974-1)



**①** 写真85の家の構造。二十一世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

**②** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

**③** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

**④** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。



写真86 山北の山。図3とともに本文参照。標高約1000m。(1974-1)

**①** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

**②** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

**③** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

**④** 山の家の構造。21世紀の土地所有権。四つ、五つが分家。右が分家。それぞれ異なる土地所有権。1、2は山の家の家の構造の構造。3は先住者と異なる家の構造。斜線部は同家の構造の構造。本文参照。

図11 香月洋一郎『景観のなかの暮らし - 生産領域の民俗 - 』



**湖水で米をとぐ**  
 沖島では、島の人びとはみな知り合いで、上その人が来たらすぐわかるという。だから、腰巻きをして上半身は蓑、首から手ぬぐいをたらしこのスタイルは、かつて夏にはごくふつうに見かける姿だった。これも埋め立てられて遺島となっているが、洗濯機を道路に向けて置く家が多く、水とのつながりのなごりを感じさせられる。



**石積みのある浜**  
 湖水で茶や茶碗を洗うと、ハエジゴやボテジゴが既服に群がり、あっという間に掃除していった。「あの頃はちょっとぬむくなった(いたんだ)ご飯でもお茶ですすいで食べたし、生ゴミは畑におぼんだ(埋めた)。ほんまゴミって出さへんかったわ」と茶谷よし子さん。現在、さん機があったところは埋め立てられているが、石垣に昔がしのばれる。



近江八幡市神島町 ―〔上〕1955(昭和30)年8月18日/斎藤義興 〔下〕1997(平成9)年8月12日/吉谷性直



近江八幡市神島町 ―〔上〕1955(昭和31)年8月5日/齋藤義興 〔下〕1997(平成9)年8月12日/吉谷性直

図 12 滋賀県立琵琶湖博物館『私とあなたの琵琶湖アルバム』



図 13A 長野県教育委員会『雪まつり』





図 15 柳田國男監修『日本民俗図録』の「喪服と新墓」



図 16 松村利規「宮崎の精霊棚」（『民具研究』第12号）